

最優秀賞

『何者』 朝井リョウ著

文学部 文学科 1年 青木美里

「怖い」。最初に抱いた感想だ。怖いといっても、ホラー小説というわけではない。幽霊が出てくるわけでも、心霊現象が起こるわけでもない。では、何が怖いのか。

本書は、就活中の五人の大学生が、一つの部屋に集まって、共に就活対策をしていく日々を描いたストーリーだ。彼らはみな、今どきの若者らしく、毎日スマホを片手にツイッターに近況を書き込み、互いの書き込みを閲覧する。自分がどんな就活対策をしてきたかや、翌日に筆記試験を控えた心境、面接の手ごたえなど、自らのありとあらゆることを発信するのだ。

本書の一番の魅力は、何といてもそのリアルさだ。就活生の、そして人間のリアルを暴ききっている。彼らがツイッターに書き込む内容は、すべて建て前だ。その裏には、嫉妬や自尊心、劣等感など、他人に言うこととはばかれるようなす黒い感情が隠されている。これは、物語の登場人物たちに限ったことではない。私たちの誰もに当てはまることなのだ。

現代では、ほとんどの人がSNSを利用している。私たちは登場人物たちのように、時間があれば自らの近況を書き込んでいる。では、その書き込みはすべてが本音だと言えるだろうか。友人の幸福に嫉妬をしていないと、友人よりも自分の方が優れていると思ったことはない、本当に言えるだろうか。私は言えない。本書を読んで、いい人である自分のベールが剥ぎ取られ、認めたくなかった自分の汚い感情があらわにされたような気分だった。どんなに自分はいい人だと思ひ込もうとしたところで、気づかされてしまう。自分自身の悪の心に。

ツイッターに書き込みをしていると、ふと自分が自分でない何者かになったような気分になることがある。そしてそれは、私だけではないはずだ。どこかの評論家を気取って物事を批判してみたり、人を斜め上から見下ろして分析をしてみたり。中には裏アカウントを作って、友人の悪口をひたすら書き連ねている人もいる。そんなことをするのは、ツイッターの中だけでは、自分が自分でない何者かになったような気分になれるからだ。いつもは偉そうな態度をとれない人でも、ツイッター上では、違う自分になれる。私の周りにも、ツイッター上では別人ではないかと思うくらい偉そうな態度をしている人がたくさんいる。発信者の顔が見えないツイッターは人を変えてしまう。ツイッターは、人間の悪の心を引き出してしまう存在なのではないかと思う。

就活対策を共にしてきた5人の絆は、ある日突然崩れ去る。一人が内定をもらったのだ。「どうして自分ではないのか。」祝福の言葉の裏に、そんな本音が見え隠れする。

幽霊や心霊現象よりも怖いもの。それは人間の心だ。嫉妬や欲にまみれた人間はどんなものよりも恐ろしい。そしてそれは、私たちだ。本書を読むと、自分自身の内側にある恐ろしさに嫌でも向き合わされてしまう。「何者」は、架空の登場人物たちの物語ではない。私たちの物語なのだ。